

良心教育

奨励	田端 信廣【たばた・のぶひろ】
奨励者紹介	同志社大学副学長 同志社大学文学部教授
研究テーマ	ドイツ観念論哲学

わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなった。更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来るのを見た。

そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである。」

（ヨハネの黙示録 21章1-4節）

本日は同志社の建学の精神に密接な「良心教育」について少しお話をさせていただきます。多くの皆さんがすでによくご存じのように、同志社の各キャンパスには良心碑が建てられています。そこには「良心の全身に充滿したる丈夫の起り来らん事を」という新島の願いが刻まれております。毎年、入学式において新入生に対する同志社からのメッセージとして読み上げられています「同志社大学設立の旨意」という文章のなかには、良心を手腕に運用できる人物の育成が同志社大学の使命である、あるいは一国の良心の育成という言葉が述べられており、頻繁に同志社の設立の精神にかかわって「良心」という言葉が使われています。良心というのは何を表しているのかということを少し考えてみたいと思います。

規範意識としての良心

私たちが良心に恥じない行為をする、良心に照らしあわせて振る舞うというときに、この日本語を理解するのは、そんなに難しいことではなく、この日本語の意味がわからないわけではない。それぞれを比較的簡単に了解していると思います。しかし、改めて良心に恥じないというときの良心とは一体何なのか。良心の中身は何かと問われると、難しい問題が出てきます。良心という単語の漢字で書かれた言葉のもつイメージが問題なのだと思いますが、良心というのは、良い心、清い心、明き心というような内容を言い表しているのではないと思っています。結論から先に言いますと、良心という概念、言葉のなかには多様な意味が含まれていますが、その中核をなしている意味は、人間と自分自身のあり方、ふるまい方について各自が心の中に抱くような道徳的な規範意識のことであると思っています。この内面的、道徳的、規範意識ということが、良心という概念の最も重要な構成要素になっているだろうと思います。

内面的、道徳的というのはよいが、規範意識（ノルム）とは何か。それは、実は人間はこうであるべきだろう、社会というのは本来こうであるべきだろうという意識なのです。現にそうっていないかもしれないが、人間は本来こうあるべきだ。「べき」というのは、日本語の難しい言葉でいうと「当為」、英語では、should、ドイツ語のsollenになりますが、こうあるべきだ、こう行為すべきだなど、「べき」ということが語られることは当然、現実にはそうっていないから、という場合が多い。人間と社会のあり方に対する現実に対する当為は、しばしば現実のあり方に対する批判的意識を含んでいると思います。

現実の行為や社会のあり方を定めていく規範は、大きく言うと、人間の社会では法律と道徳になります。法律は我々の行為のあり方を規定しています。刑法、民法があり、法の規則に違反して行為をすることは許されません。私たちの行為を定める一つの規範です。もう一つは道徳です。人間が人間である限り、こう行為すべきだ、こういうふう振る舞うべきだ、これは道徳的な規範です。法的規範と道徳的規範はどう違うか。法的規範は我々の心の外にある外的規範です。それに対して道徳的規範は心の内にもつ内面的規範です。この二つの関係がどうなっているか。おそらくそれは内面的規範が根底にあるはずで、その上に法的規範が形成されてくるのだと思います。

カントの道徳論

その意味で、内面的で道徳的な規範についての意識が「良心」という言葉の一番中心にあるのだらうと私は思っています。道徳意識を強烈に主張した哲学者がいます。ドイツのカントという哲学者です。カントの倫理学、道徳哲学は人間が自らの心の内に、自ら自身の力で自らが従うべき法則、規範を打ち立てることを強調します。自分が従う、自分が行為をするときに従うべき規範を自分自身の心のなかに立てる。外から規範が与えられるのではない。法律は外から与えられます。道徳は自分自身が内面から、自分の力で、自分が従うべき法律を立てる。これを自己立法と言っていますが、自分が自分の法律を決めて、立てた法律に従って行為をするという主張をしています。

良心に絡んでカントの主張は、いろいろ問題をはらんでいると、後に哲学者や思想家に批判されます。一つは、自分の心のなかに自分が立てることからすると、各自に極めて身勝手な自分に都合の良い行為の規範を立てるのではないか。規範である限り、すべての人が従うものでなければならない。私の個人的な規範と、すべての人間に通用する普遍的な規範の間のギャップ、ずれ、これがカントの話では埋まらないのではないか。普遍性と個性のギャップについての批判。もう一つは内面と外面です。私たちが実際に行為をするのは具体的状況においてのことです。このなかで実際我々は行為をするとなると、内面に抱かれた普遍性、いつでもどこでも通用するような規範が、具体的な現実のなかで生きているのか。具体的な現実のなかで何か具体的な状況を実現しようとして行為をすることは現実のなかに飛び込む、いわば、手を汚すことになる。何も行為しなければ人間の手は汚れません。この問題について、カントの後に出てきたヘーゲルという哲学者は『精神現象学』で、良心について奇妙な話をしています。

ヘーゲルによれば、良心というのは二つの契機がある。一つは行為する良心。良心は行動行為、振る舞いにかかわる。我々がどう行為すべきか、どう振る舞うべきかに即して、良心、規範がある。行為をすることは、具体的な現実に関与し、コミットし、手を染める。それに対して行為の正しさの普遍性を主張する人がいる。自分は一切何もしないで評論だけする人がいる。あれはまずい、これはまずいと言う。

ヘーゲルの良心論

ヘーゲルは「行動する良心」と「批評する良心」の二つの言葉をもってきます。これは相対立します。批判し、喧嘩しあいます。二人の立場の対立、行動する良心は常に現実のなかに飛び込む、そのことによって自分の手を汚す。それに対して批評する良心は高みの見物をして評論家のように批評だけをする。自分は実際の行為をしない。この二つを、どう調停するか。お互いの立場を認め合いながら、双方、より高い立場で二つの良心が一つに統合されていくというプロセスを叙述しています。これは明らかにカントの道徳を意識しています。

もっとすごいのは、実は我々が良心という言葉からは想像もつかないような良心についての扱い方を、ヘーゲルはこの著作のなかでしています。『精神現象学』という著作は、人間が世界と自分を認識していく、より豊かに、より深く認識していく様子を段階論的に叙述している。最初は貧弱な意識、認識、それがどんどん経験を積むことによって高い意識、認識になる。より深く、より正確に人間と世界をとらえるようになる。これは段階論です。人間のポテンシャルがアップしていきます。非常に長い道のりがありますが、その究極の知が、有名な「絶対知」というものです。絶対的な知。ヘーゲルは「絶対知とは神の自己認識のことである」という言葉も残しています。

段階には三つあります。意識、自己意識、理性へと、より高次に世界を認識していきます。ところがこの三つを全部まとめあげて一つにしている精神という能力があります。精神も何段階も段階を通ります。精神の究極の最後のところに良心がある。ヘーゲルは精神の最高段階が良心であるという位置づけをしています。良心の一つ手前が道徳的意識です。道徳的規範的意識と言いましたが、ヘーゲルは、それに止まらないものを付け加えようとしている。「道徳的意識を越えたものが良心だ」というわけです。世界と人間についての最高の知のあり方を、ヘーゲルは良心と呼んだことになります。そこに込められた意味は難しいですが、我々が良心という言葉から漠然と想定しているものよりは、はるかに多くのものが良心に込められていることは確かだと思います。

共に知る

ヘーゲルがよく使う手段ですが、二つの対立する人間のパターンが、良心をめくって対立し、抗争しあいながら、より高次のレベルで二つが統一されていくという話をしました。conscienceが良心という言葉のもとです。フランス語も同系統の同じような言葉がありますが、この言葉の元元はラテン語のコンスキエンティアという言葉です。西洋の歴史で良心という言葉として語り継がれてきた中身です。コンは一緒に、ともに、という接頭語です。スキエンティアは知です。コンスキエンティアという原義はwith knowing一緒に知る、together knowingともに知る、という言葉を含んでいます。日本語の良心という言葉とは、かなりかけ離れています。ヨーロッパの人たちは良心の言葉の根底には、そういうことがあることを、どこかで意識しています。一緒に知る、誰と一緒に知るのか。私が人間と世界のあり方についてより深く、より豊かに知るのですが、あなた一人が勝手にこういう行動したら良いという身勝手な知や規範のあり方ではない。「私以外の他の人間と共に知る」という意味が、そこには含まれています。その意味では共知とは、一つはまず、他の私以外の人びとと一緒に知る。もう一つは、多くのヨーロッパの思想家たちの良心について書かれたものを見ると、他の人間と共に知ることとともに「神と共に知る」、私があることを知る、人間の世界を越えた神とともに知ることが良心という言葉のなかに含まれていると主張する文章がたくさんあります。イメージとして円錐形を思い浮かべてほしいのです。底辺にある円は中心だけで具体的広がりをもっています。Together, withが、横軸で広がるということです。横に広がっているだけでは、ただの円であり、逆円錐でも、円錐でも、神は超越した上にあるのか、根底にあるのかは別にして、頂点に我々を越えた存在がある、そのこととともに、それを意識しながら同時に知ることになれば、円錐の頂点は神であり、円錐の広がりは他者、他の人びとであるということになります。

ものを知る、その知り方は常に道徳的でありますから、規範を含んでいます。こうあるべきという中身を考えたとき、一人の勝手な思いではなく、他者もまた、そうあるべきだと思っっている。人間としてはこうすべきだ、人間は私一人だけではなく、多くの人たちが含まれています。そこを考えれば、はじめから規範には普遍性が含まれているが、その普遍性はど

う獲得されるのか。私は他の多くの人びとと共に人間と社会のあり方を知り、考えることから初めて普遍性の内実を獲得されると思っています。しかしそれは所詮、人間の世界の出来事であり、有限な人間が自分たちのあり方について問うていくことについて、それが正しいかどうかという根拠は、どこにもない。一人で考えるより十人で考える方が良いものが考えられるという根拠は、全くありません。

西洋の哲学思想の伝統のなかから良心という言葉を考え直してみると、極めて複雑な、豊かな良心という概念の内面的構造が見えてくる。そして私たちの生きている現実には照らしあわせてそのことを考えれば、決して空理空論ではなく、現実のなかに生きることだろうと。

「良心教育」ということを掲げました。本当は良心は教育できないと思っています。心は教育できません。しかし良心という言葉が深い内実を含んでいるとするならば、同志社大学が「良心教育」を掲げることは、実は凄まじいミッションを自らに課していることにつながりかねません。それは世界の人間のあり方について、もっとも豊かに、もっとも深く、人間社会を越えたものに照らしあわせながら人間と世界のあり方について認識できるような人間をつくることは、凄まじい大きなミッションを掲げたということになります。新島襄が、そういうことを考えていたかどうかは分かりませんが、道徳的規範意識をしっかりと自覚的にもった人間をつくることを考えていたのは確実だと思います。それが広がれば世界と人間のあり方についての大きな話につながっていく。そういう中身をもつ言葉でありうるのだということを、私の本日のお話の締めにさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

2011年4月20日 京田辺水曜チャペル・アワー逝去者追悼礼拝「奨励」記録